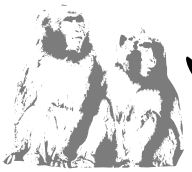
タマ動の楽しみ方

多摩動物公園



（学生記者取材班）

駅一つの近さに動物公園がある大学も珍しいだろう。隣り合わせる大学も、立派にもう一つの動物園、とヤユする向きもあるけれど。

東京都多摩動物公園。タマ動――と学生たちは呼ぶ。「何？ソレ」と都心の友だちにバカにされたという話があるが、これも”お隣さん“感覚のたまものである。というのに―、「行ったことないのよね。一度は行こうと思ってるんだけど」こんな声のなんと多いことか。それならと、秋の一日、出かけました。動物たちへの愛、募らせて……。

チョウのいる坂道

正門から右手の急な坂をのぼる。けっこうシンドくて、10分も歩いていないのに、一休みしたい。こちらの気持ちを推し量ったような場所に、おおきな屋根つきの昆虫生態園がある。くつろげる、こころが休まります。

チョウが美しく飛び交う大温室、外国産昆虫が見られる左ウィング、それにバッタやコオロギなど身近な昆虫たちのいる右ウィング。3つのセクションがあるが、一番のにぎわいは大温室。上からみると建物自体もチョウの形――。

大温室には、色も葉ぶりもさまざまな植物が生い茂り、岩や渓流も再現されている。天井はガラス張りになっていて、光燦々。通路はくねくねと、ひと一人通るのがやっとの所もあるから、どこか熱帯の地の奥深く迷い込んだような気持ち。

◆トラの「センイチ」大阪へ◆

多摩動物公園で今春誕生したアムールトラの赤ちゃん。8月一般公募で決まった名前は「センイチ」。ことしのタイガースのように強くたくましく、と星野監督の名にちなんで。折から大阪・天王寺動物園には雌トラ一頭というので10月10日に婿入りした。一般公開は17日――日本シリーズの開幕前日だった。

「起きて、タムタム」

その空間を、大きなチョウが舞う。近く遠く、そこらじゅうを、あでやかに、羽の意匠を競いあうかのように。チョウの紋様を「まるでデザイナーのような造形意思」と形容した詩人もいた。

数など知れないが、ここに舞うのは2種類のチョウだ。沖縄諸島に生息するマダラチョウ科オオゴマダラと、中国やインドに生息するアゲハチョウ科ナガサキアゲハ。体長は両方約七センチ、子どもの手のひらサイズ。そんなに大きい。

日曜日とあって、小さい子を連れた家族やカップルなどでにぎわっていた。混みあう道の曲がり角で、

「チョウを指にとめてみよう」

とレクチャーするおじさんがいる。4歳くらいの男の子が、おじさんの人差し指の立て方と自分の指の立て方を見比べしつつ、じっと待っていた。

「来たよ、そう、動かないで」

オオゴマダラが指の周りをヒラヒラと舞い、またどこかへ行ってしまった。男の子は、なおもじっとして動かない。その横を鼻歌まじりに蝶ステッキを振り回しながら、女の子がニコニコ顔でスキップして通りすぎた。後ろから「こら、コラ」と追いかけるお父さん……（蝶ステッキと勝手に命名したのは、チョウの絵がついた棒のこと。昆虫園本館でもらえる）。楽しみ方もいろいろ、平和でのどかな光景。

チョウといえば、美しき暗喩のゆえに、

♪あなたに抱かれて蝶になる……

というカヨウ曲もあったし、「コレクター」という有名な、でもちょっとヘンタイな映画（蝶の標本づくりのように女性を……という筋ですから）もあったけれど、なにを措いても「この一行詩」と物知りは言う（と、このへんは教えを請いながら書いている）。

てふてふが一匹韃靼（だったん）海峡を渡つていつた。

安西冬衛の「春」。これ一行。イメージの広がりと喚起力、絵画的でステキ、でしょ。

花の命もチョウの命も短いけれど、死と再生を繰り返し、ここでは年中チョウが舞う。木の幹にはカブトムシがいたり、木の枝にはハチドリが止まっていたりと辺りを注意して見るといろんな発見のある場所だった。

しだいにピュアな気持ち、やさしい気持ちになってしまうような。誰か大切な人と足を運んでみませんか？

ふたりのハートの上に、ふわりとアゲハが止まる……かもしれない。

（津江）

オーストラリア園を奥に進むと目に見えるのはコアラ館である。そこにすむのはタムタムというコアラ。84年、日本に初めて6頭のコアラが「来日」した。タムタムはそのうちの1頭だ。

タムタムに会いに行くと彼はお休みのようだった。うずくまるように顔を下に向けてじっとしている。人間が体育座りをしている姿にもそっくりだ。ちょうど餌を食べたあとらしかった。

コアラは一日の大部分を木の上で

寝てすごすという。タムタムも例外ではない。しかもタムタムは20歳。人間にすると、100歳にあたる。他のコアラがお客さんに、愛嬌と、木によじ登ったりパフォーマンスをしていても我関せずといったふうである。

「起きてタムタム!」。5歳にも満たない少年が呼びかける。少年は父親の腕に抱かれていた。

「タムタムはお昼寝中なんだよ」と優しい父親の声。

「なんだぁ」と少年。

なにしろコアラは1日20時間近く寝ている、そうだから。

彼らが歩き去ろうとしたとき一瞬だけ、タムタムはムクッと顔を上げ、少年の方に目を向けた。開いているかどうかわからないほどの薄目で。表情はほとんど動かなかったけど、笑っているように、見えた。残念ながら少年は気がつかなかったようだったけれども。すぐにタムタムはネズミ色のからだを抱えるようにして顔を下に落とした。

トシをとっても、まんまるい体にふんわりとした毛並み。愛らしくもすこしダルそうな長老――。(小野)

サル山のサルを見て考えた

キミはねぇ、と編集室に命じられた。

「サル山ウオッチングをやってもらおうか」

「エッ、なんかサルと私、関係があるんでしょうか」

「怒ると、似てくるよ。サルと戯れながら、ハツラツとした目で観察におけるリアリズムと、小匙いや耳かきほどの考察……だけでいいから」

そんなぁ。よく分からない難題を。

カラスのような声をあげて、もう大騒ぎである。1匹が騒げばみんなが騒ぎ出す、1匹が走ればみんな走り出す……。おやつのリンゴをめぐって子ザルが2匹、キーキーと追いかけっこが始まった。と見るまに、斜面を2匹もろともすべり落ち、ギャーギャーわめくその先を、リンゴが無情にころがり落ちていく……。

やっぱりサル山にきてしまった私であった。どこか吸い寄せられるように。きてみれば、楽しい「おサルのお山」。

オトコの暴力…に非ず

サル「山」というぐらいだから、地上からこんもりしているのが普通だけど、ここは地面を掘り下げた造り。「見下げた(る)サル山」である。

50匹近くがいるそうだ。某所で聞くように物を投げられることなどはなさそうだからひと安心して、まず写真を……と構えたが、じっとしていない。始終動き回ってばかりだからシャッターチャンスを逃す、撮れても写っているのは豆粒のようなサル……!

でも、いますねぇ。いろんなのが。平らなところは自分で歩くが、山の斜面になると母ザルにしがみつく子ザル。これ無性にかわいい。強そうなサルの顔色を伺い、機嫌が良さげなら前を行き、機嫌が悪いとみれば、そっと後ろに回るいじけたようなサ

◆危うしニホンザル◆

どこかのテーマパークから逃げ出した台湾ザルとニホンザルの雑種が野生で大繁殖、純粋なニホンザルの生態が危ぶまれているそうだ。農林水産省も捕獲作戦に乗り出している。台湾ザルはニホンザルより体が二回りほど大きくしっぽも長い。「将来ニホンザルは絶滅してしまうかもしれません」とサル山の担当者。

ル……。

やがて近寄り毛づくろいしたあと、お尻をつき出した。強そうなオスがのしかかる。「オトコの暴力！オンナの卑屈！」とフェミニズムの闘士は目をつり上げるかもしれないが、秋の繁殖期とはいえすべてを「交尾」とみるのはアサハカで、よくあるのは「マウンティング」という上下関係の確認行為。同時に劣位のサル同士でも見られ、個体間のストレス解消法、これで群れ全体も丸く収まっているのだという。

どおりで、あちこちでやっているわけである。「あれ、何してるの？」と坊やに聞かれて、困った顔のお母さんもいらしたが。

ボスが消えた!?

ところで、いまニホンザルの間で妙なことが起きている。ボスがいない!? ウソッ！というような事態が。

近年の「サル学」は、野生のサルの一部ではボス交代時に、自分のDNAを残すために母親と一緒になって先代の子を皆殺しにする「子殺し」もあることを教えるが、一方で餌付けされたサルでは「ボス不在」がだいぶ前から顕著なのだという。「ボスザル神話」の揺らぎである。

リーダー的存在はいるのだが、チンパンジーやゴリラに比べて、いかにも「ボスらしいボス」がいないらしい。

動物園案内ボランティアの方に話を聞くと、「サル社会でも女性が強いのさ」とおっしゃった。

サルはメス社会なのだそうである。オスはあちこちでタネをばらまくため、たとえ親子間でも子ザルの父親は判然としない。そこへいくと腹を痛めた母子関係は揺るぎなく、母子密着の母系社会が形成されるというわけ。

実質リーダー的なオスザルも、メスと子ザルたちの用心棒的な仕事をするくらいで、群れの実際の統率はメス集団の意向に左右されるのだそうだ。どこで食事を摂るかなど、エサ探しのルートを決めるのも年長のメスだそうな。上野動物園ではメスがリーダー的存在だったこともあるそうだ。

そうだとしても、昔からではなく、なぜ10年あるいは20年ほど前から「ボス不在」が顕著になってきたのだろう。

シロウト考えだが、ボスの主たる野望と任務は、「利己的遺伝子」（リチャード・ドーキンス）の命ずるままに自分のDNAを残す欲望充足と、生存がかかるエサ獲得の群れ行動。命をかけて敵から集団を守る危機場面もあるだろう。ケンカも強くなきゃいけない。

山を下って餌付けされたサルも多いが、動物園のサルとなると、エサの心配はまるでなく、食餌の質も味だってぜいたくになっていることだろう。同じ群れだからテキと遭遇することもなく、「ハーレム」もある。これ以上、何が悲しくてソンな役回りを……というようなものだろう。野生を生きる危機感が「強いボス」を必要としたとすれば、危機なき充足がボスを放逐し、またなり手もいなくなった。そういうことではないかしら。

で、ここの「リーダー格」はだれ？どれなの？

サルの顔には識別用に入れ墨があるので、探そうと試みるがそもそも顔が見えない。上野動物園のサルは屋久島出身、ここ多摩のサルは映画

◆ボノボ◆

言語を持った〝最後の類人猿〟とも言われる。なかでも天才君が「カンジ」君。育ての親のスー博士（米ジョージア州立大言語研究所）の著書などによると、７００もの文章と２０００以上の英単語を理解し行動する。穏和で一家の家族的情愛に満ち、性行動も日常的、とヒトに近い。コンゴ民主共和国（旧ザイール）だけに棲み、ピグミー・チンパンジーという呼び方より「ボノボ」のほうが定着しつつある。

「24の瞳」の小豆島出身。そのヒトミじゃ見分けはつかない。

ベテランボランティアは毛並みを見て、「ほら、あの、エチゴが」と教えてくれた。♂ 推定25～30歳。繁殖期になれば、どのオスが一番人気かでリーダーが特定できるのだが、先代リーダー・ゆうタンの死後繁殖期まで少々間が空いたため、1年ほど経ってからやっとエチゴが次なるリーダー格とわかったそうだ。

毛抜きの連鎖？

親「サル人気あるねー」

子「うん。ずっと見てても飽きないもん！」

そんな会話も聞こえる。

ほんとにアキない。

親毛が抜けて赤裸のサルが何匹かいるけれど、あれは皮膚病かしら…？ とここでもボランティアの方に登場していただく。「あれは皮膚病じゃなくて、順位が低いとかのストレスから自分の毛を抜いちゃう悪いクセのサルだよ。そういうサルは自分の子供の毛も抜いちゃうから、その子も毛抜きのサルになっちゃうんだ」。「家庭内暴力の連鎖」いや＜毛抜きの連鎖＞かぁ。毛抜きの原因のストレスがなくなってもまだ毛を抜くサルもいるそうな。何だかストレスからキッチンドリンカーになってしまった主婦みたいだ…。

もう目が離せずに、結局40分はサル山の前にいたのである。好き勝手に動き回るのをウオッチングしつつ、個人的には本誌「夏季号」の『サークル棟ルポ』取材を思い出してしまった。

みんな好き勝手に生きている、あそここそ中大のサル山だな～なんてフト考えてしまった私であった。

（酒井）

続――チンパンジーにはナメられた

「チンパンジーのイベントが始まるよ」と聞いて、急ぐ。しかし、チンパンジー舎への道はまた結構上り道が続く。それほどきつい坂ではないのだが、ゆるやかに続く上りといった感じ。どことなく中大の正門からの感覚に似ている……地続きですからね。地形も同じ。

「アジア園」のエリア。パッと見て、チンパンジーの柵が低いことに驚いた。これでは脱走するんじゃ……。前にタマ動から何か脱走した、って聞いたことがあるし、後で飼育課長の石田戦（まさる）さんに伺ったところ、「チンパンジーの脱走はさすがに困るでしょうが（笑）。

周りに水が流れてたでしょ？ チンパンジーは水が嫌いだから逃げないんですよ。一応柵も電気柵だしね」とのこと。

ここにはジャングルを模した？アスレチック設備や、チンパンジーの知能の高さを間近で見られる人口アリ塚・ナッツ割り器などの設備がある。

隣接した建物から、お目当ての「自動販売機」のイベントが始まるのを待つ。

２００語ほどの言葉を覚えた京大霊長類研究所の「アイ」、英語２０００語を自在に使いこなし「ＴＯＥＦＬ」でも負けそうな「ボノボ」（ピグミーチンパンジー）と、上には上がいるが、ここではチンパンジーが自動販売機みたいなのにお金を入れて買い物をする芸の披露。

ガラス越しだけど間近で見られるのさ、ワクワク…と待つも、待てど暮らせどイベントが始まらない！今日はやらないのかしら、と思ったら1匹のチンパンジーがこちらに近づいてくる。どきどき……。

ゴロッ（チンパンジー、その場に寝転ぶ）。

は？　なんとチンパンジーはその場に大股開きで寝転び、草を食べだす始末。な、なめられている…っ。動物園に来て逆に動物に見られるはめになろうとは。何となくショックを受け、足早に移動したのだが、後続の記者によれば「ジュースの缶を持ったチンパンジーを見た」そうなので、自動販売機のイベントは行われたらしい。がびーん。

いやしかし、人口のアリ塚に草を入れてその先に付いた蜜をなめるチンパンジーの様子を見たし（横から蜜を掠めとる子どものチンパンジーもいた）、何よりヒトをなめきった態度が、知能の高さの証し。

――なにか、サル山のサルの屈託のなさが、いとおしく蘇ってきたり。

（酒井）

彼と彼女とハクビシン

ハクビシンのコーナーに、仲のよさそうなカップルがやってきた。

「わぁ、カワイイ！　リス？　タヌキ？」

顔のしま模様。ちょろちょろ動く小さな体。愛嬌あるハクビシンは、すっかり彼女のお気に入りに。

「でも、ハクビシンって、あのＳＡＲＳで、ほら……」

彼氏のほうはちょっと心配そう。未知なるＳＡＲＳ、研究が進むにつれて「ＳＡＲＳコロナウイルス」の宿主、あるいはウイルスを伝播した主役ではとされたのが、意外にもハクビシン。もっとも、飼育員の話によれば、動物園のハクビシンは別、「安全」だそうだ。

中国ではこのカワイイ小動物をふつうに食している。それがＳＡＲＳも招いたのだが、……中国人の胃袋、おそるべし。なんて思ってると、

「えー知らなかった！コワーイ」

彼女は、やっぱりご存知なかったようである。

「日本にもいるんだよ、ハクビシンが」と物知りの彼。

エー！　それはわたしも知らなかった……。という顔をしていた人はほかにもちらほら。結構みなさん、２人の会話に耳をそばだてていたみたい。

「たしか、このあたりにも生息しているよ」

ウソ⁉　こんな近くに！　さっそく生息分布図を見ると、たしかに東京西部も赤く塗られている。このオトコ、なかなかやるなぁ……。入念な下調べの成果なのかもしれない。むろん彼女は、博識な彼にほれぼれ、という表情で長いことハクビシンを見入ってましたよ。いまどき動物園デートも悪くない？

（江部）

その瞬間、私はイノシシになった

広い動物公園の森の散歩道を歩いていました。食べ歩きで遅いお昼を

とりながら。

そこで、運命の出会いがあったのです。

彼は、なんとあの広い敷地で、たった一人（？）で住んでいました。彼は、檻の中から外の景色をうらやましそうに見つめていました。彼の檻は、他の動物のものと大分離れたところにあったこともあり、その悲壮感にさらに拍車をかけていました。

「ふが～（出たいよ～）ふが～（遊びたいよ～）」。私には、泣き声がそんな風に聞こえました。

おそるおそる檻に近づきました。彼は興奮していて、鉄格子を壊してまで飛び出してきそうな勢いだったからです。

果たして、ものすごい勢いで、突進してきました。私のほうへ。すこし驚きながらも、私、彼の鼻に手を近づけました。彼も、身を乗り出しました。

つぶらなヒトミが見つめています。そう、彼女が手に持っている、フライドポテトの空箱を。ああ、花より団子。

ふたりの恋は、始まりもせず、終わりました。

イノシシ被害に遭っている皆さん、動物のつぶらなヒトミは罠です！あなたが求めていること、動物は何もしてくれませんよ？

（関）

ライオンバスが行く（同乗記）

一番人気は、アフリカ園。ゾウ、キリン、シマウマ、フラミンゴ……13種のそうそうたる顔ぶれに、どこも大盛況。なかでもライオンバスには終日長蛇の列が。

約1ヘクタールのライオン放飼場をバスに乗って走る。自然に近い生態を間近で観察、スリルも味わえる、というこのスタイルは、昭和39年、多摩動物公園が世界に先駆けて手がけたもの。サファリパークのオリジナルは、多摩だったのである。また、3年前（平成12年）からは、バスも地球環境と動物にやさしい圧縮天然ガス車に。これも国内の動物園で初。ちなみに園内を走る軽トラックも電気自動車。動物たちをとても大事にしている気持ちがわかりますね。ライオンバスの外観は、シマウマ柄。ライオンさんのよろこぶデザインなのかな？

待つこと15分。程よい待ち時間で、横のペリカンの餌付けのパフォーマンスを見ることもできた。飼育員がイワシを投げる。20羽ものペリカンに、なぜかダチョウとカラスも混じって口を開けている。なんだかほほえましい。でも食べ方はダイナミック。「食」ってこんなにも生々しい。わたしもお客さんも歓声をあげたりして見入った。

いよいよライオンバスに乗りこむ。座席はみな両側の大きな窓に向いている。ただし混雑している日曜日。小さい子どもとお年寄りに席をゆずって、若者は立ち見。その際は、絶対につり革につかまりましょうね。バスは結構なスピードで走る。近寄ってくるライオンもスリルだけど、突然の減速で何度ひっくり返り

そうになったことか。

20匹のライオンが広い敷地内にのんびり寝そべっている。バスの窓の高さに合わせた丸太製の台が点在し、そこで1頭または2頭がわたしたちを待っている。あまりその場を離れない。聞くと、おのずから定まった順列があって、「棲み分け」なのだとか。「入り口付近が、闘いに敗れた一番弱いライオン……」。ああ、百獣の王の世界もタイヘン、と言いそうになるが、無用の争いを避ける厳しくも賢明な掟である。

台の前でバスが止まる。ライオンが窓に飛びかかってきた。「ガオーン」――もうみなびっくりして車内は騒然。バスからぶら下がった骨付き肉に喰らいつく。スリル満点、こわくて泣き出す子どもまで。

2頭めのアタック。やはり迫力が。でも、なんだかかわいらしくも思えてくる。

バスは次の台へ移動。1頭が飛びついてくる。もうこわくない。一緒の小野記者も落ち着いて写真を撮っている。そして次の台……。だんだん読めてきたゾ。このバスは決まったルートをたどっている。そして台に乗っかったライオンを挑発もする……そうでなければ、ライオンも慣れっこになって怠惰に寝そべるだけか？　安全とスリルを同時に提供するには仕方ないことではあるが。最後のほうでは、ライオンも飛びつくことをやめ、アキたような目を向けていた、ようにも見えた。

その奥、一般来者は入れない一角にも特別に案内してもらった。日だまりに、3頭の赤ちゃんライオンが、ママと一緒に。来春には、一般公開予定――必見よ。

（江部）

フクロウ画伯のスケッチブック

いつぞやモノレールで、「猛禽はカッコイイ」というタマ動のポスターを見かけたことがある。その前は「ライオンの顔はデッカイぞ」だったかしら。

猛禽類って知ってます？　実は、ワシ・タカ・コンドル・フクロウに代表される、タカ目とフクロウ目の鳥類の総称。「ハリーポッター」のおかげで、現在、多摩動物公園でも人気急上昇中だとか!?　本や映画では、よく見かけるかもしれませんが、実際に見たことがある人は少ないのではないでしょうか？

広い動物園の中で、入り口を入ってちょっと歩いたところで、彼らと会うことができます。

猛禽類の活動時間は、私たちが眠っている夜の間。もちろん動物園の開園時間は、昼から夕方にかけてなので、テレビや写真で見るような、ドウモウな生態を見ることはできません。

「ミネルバのフクロウは夜飛び立つ」ワケですね。

みんながみんな、止まったまま動かず、フクロウの目はトローンとしていて眠そうでした。

ゴメンなさいね、と写真を撮る私の横で、スケッチブックを広げて絵を描いているおじいさんを見つけました。

鉛筆で、羽の細かい模様まで、丁寧に描いていきます。目の前にいる実物よりも、今にも動き出しそうな躍動感！

早川淳一さん。話を聞いてみる

と、会社を定年退職してから、約9年間、中野の自宅から、多摩動物公園に通いつづけているとのこと。動物園はここだけではなく、上野動物園など近隣の動物園も回って、絵を描いていらっしゃるそう。1枚の絵を仕上げるのに、最低でも2～3回は足を運んで。小さいころから絵を描くのが大好きで、飛行機や、汽車なんかの絵を。そしていまはフクロウ……。

「猛禽は、羽の模様がきれいだし、かっこいいよねえ。特にあの爪とクチバシ。ネズミやモグラを捕まえる時がいいよねえ」。鉛筆を持つ手を動かしながらおっしゃった。

スケッチブックを見せてもらうと、猛禽類はもちろん、チーターなど他の動物たちの作品もあった。どれも丁寧に書き込まれていて、動物たちに対する早川さんの深い愛情を感じます。

そんな早川さんの周りには子供たちが自然と集まってきます。大人たちも、足を止めて。「上手！」なだけではない、人を引きこむ「やさしさ」。それがスケッチブックにあふれている。

「他に描いてみたいモデルはありますか？」と尋ねると、「能を描きたいなあ。あの独特の雰囲気を絵に表してみたいよね」。ヒトを描いた絵も見てみたい、そんな気持ち。

深い思索にふけるように、フクロウはピクとも動かない。「多動性障害」とは無縁な、この丸っこい智者の存在感。（関）

デカくてほのぼのインドサイ

サイはでかい。そりゃそうだと言うでしょう。でもナマでみると、そのでかさがよく分かって本当にびっくりなのだ。ものの本によると、大きいのは体長3メートル、体重2トン超、というのだから。

子どもたちは、「うわっ！」とか「ギャー」とか、まるで怪獣に出くわしたかのように興奮するし。コワイとおかあさんの陰にかくれる子もいる。

大人だって負けてはいない。「ほぉ」と目をまん丸にするおじいちゃん。サイを背景に仲良く写メールのポーズをとる女の子たち。インドサイの前は大にぎわいである。

でかい。それだけで十分見ごたえがある。が、よーく見ていると、かわいらしくも思えてくる。ゆったりした動作、つぶらな瞳……。見れば見るほど味があるのかもしれない。多くのひとがクギづけになっていた、そのとき、

「ブワックシューンッ！」

サイのくしゃみ。みなあっけにとられ、ことばを失った。なんとダイナミックな……。ちょっと感動にひたる。そしてすぐに吹き出した。その場にいた人々が一緒に笑っている。ヘンな一体感。

でも、一番おかしがっていたのはインドサイだったりして……。白っぽい鼻水をたらし、ぽかんとした顔をこちらに向けて。なんだかサイまで一体化して、ひとつのコントができあがってしまったみたい。と、ほのぼの温かい気持ちになっていたのはわたしだけかもしれませんが。

ちなみに、多摩の2頭はこの春、ネパール王国から贈られたインドサイ。絶滅の危機に瀕している貴重種

◆カンカン&ランラン◆

コアラは多摩にいるけど上野にはいない。パンダは上野名物で、多摩にいるはずないのに……いるんですね、カンカン（♂）とランラン（♀）が。園内「ウオッチング・センター」一階に剥製で。日中国交回復記念に中国から贈られたジャイアントパンダの初代ペア。昭和47年11月、上野動物園・一般公開の折は「3時間並んで見たのは30秒」という騒ぎだった。世代的記憶をもつお父さんやお母さんと一緒にどうぞ。ここなら心おきなく対面できる。

モグラのお宿

（江部）

正門入り口を入って坂をまっすぐ登っていくと、右手になにやら怪しい小屋がある。向かいにはインコが奇声を上げている。建物は白くて小奇麗。ふと上を見ると、「モグラのいえ」。この8月お目見えしたばかり。

中は6畳ほどの広さで薄暗かった。アズマモグラの棲み処だった。モグラは光に弱く、長時間光を浴び続けると、ダメらしい。展示ケースには1匹のモグラが。ガラス張りに土が敷いてあったが、「迷路」だった。もちろんモグラが創ったものである。

初めてお目にかかったモグラはかわいらしいともなんともいえない様相だった。ネズミは見たことがあるけれど、ネズミよりは親しみやすい……かな。ネズミは尻尾が長く耳があるが、モグラはハナが長く耳は穴だけである。目は皮膚に覆われていてちっとも見えない。

「モグラは縄張り意識が強い。2頭は同じ場所に飼えないんだよ」と飼育課長の石田さん。

「2頭飼うとどうなるんですか」と記者の質問に、「かたっぽがもう一方を殺しちゃうよ。だから無理だね」となんとも恐ろしいお言葉。一個体で5～6アールは必要だという。

せわしなく、自分の「お城」を行き来するモグラからは想像もつかない。体をくねくねさせながら動き回る姿に愛嬌さえ感じるというのに。

壁にはモグラのオスとメスの区別方法が記してあった。なんでもお尻で見分けるらしい。オスは丸い尻の穴がひとつでメスは横開きな尻の穴の上になにやらもうひとつの穴があるという。その図解は細胞に毛が生えたような図にそっくりだった。

子どもが数人「モグラのいえ」の中に入ってきた。「わーい、モグラさんだぁ」と展示ケースをどんどんたたく子どもたち。モグラは迷惑そうに動き始めた。しかし、ガラス張りで中は丸見えである。しばらくすると勘弁したのか、自分の休憩所と思われる少し大きな土の小部屋でじっとするようになった。相変わらず子どもはどんどんとたたく。

モグラはお手上げ。まさか手を挙げはしなかったが。

（小野）

動物の観察のすすめ

私たち学生記者は取材にあたり石田飼育課長にレクチャーを受けました。

アフリカ園のキリン科アミメキリン、ウマ科グレビーシマウマ、ウシ科シロオリックスがいる広場で、動物の観察の仕方――。

ターゲットはアミメキリン。まず、このキリンだ、というのを1頭決めてそれを3分くらいじっと観察します。ちょっとした動きも逃さずに見て、「それに疑問をもってごらん」と。

なかなか見つけきれないでいると石田さんは、キリンは餌をとるとき・食べるときに面白い発見があると解説しはじめました。

キリンはよく見ると細かい網目のネットに入っている青草を先がとがった形の舌でひっかけるように

◆広さは上野の3倍◆

多摩動物公園は昭和33年の「子供の日」に開園。当時の飼育動物は130種、550点。現在は昆虫網を除いても191種、1508点（平成14年春現在）。入場者数は年間ざっと100万人。「上野の3分の1ですが、広さは3倍」（庶務課）。

取っていたのです。キリンの舌はこのため50センチもあります。口元に注目していたら、舌の色は黒であることもわかりました。体の表面の黄色からは想像できないけれど。

そして食べ方。キリンは餌場から離れたところでもいつまでも口をもぐもぐさせています。ウシと同じく反芻（かみもどし）するからだそうです。ちゃんとキリンにも胃が四つあります。そう言われてよく首を見ているとモノを噛まない。長い首というのかノドを、カタマリが、「下から上へ」上がっていくのが目撃できました。

「ワー、かわいいな～」だけで終わらない、動物観察のすすめ。

観察するうちに、小さなころからの大疑問もよみがえりました。

しかしなんで、キリンの首はあんなに長いワケ？　ねぇ、どうして？

見晴らしよく敵の発見にすぐれ、高い木の草を食べられる、と適応進化の有利を説く「用不用説」も、なにか結果論的でしっくりこない。頭のてっぺんまで血をめぐらすためにはケタ外れの「高血圧症」だろうし、肩こりも相当なものだろう、などと。そのなかで、一番気に入っているのは、寺山修司という天才演劇家（故人）のこんな説。

「キリンはあるとき、種の決断において、首を長くしようと意志したのさ。不利も承知のうえで」

大した発見もなく、意志あるキリンの前を離れました。（津江）

動物園トレビア
園内の動物の9割は…××である

動物園は、むやみに動物を増やしてはいけない。少子化で、困っている人間の世界とは正反対に。

現在、全国の動物園では「ズーストック計画」というものが進行しています。これは、むやみに野生の動物を連れてこないで、動物園もしくは動物園同士の間で動物をまかなおう、という計画です。「だったら、どんどん子供を産まなきゃ、追いつかないじゃないか！」と思うかもしれませんが、そうはいきません。「人間、すなわち本能の壊れた動物」（岸田秀和光大学教授・精神分析学）とは違って、動物たちは本能行動にもとづくルールがあります。それに、動物園には動物園ならではの固有のルールが。

Q．動物園の中で、群れで行動するキリンやシマウマでは、オスとメスってどのくらいの割合になっていると思いますか？

①オスが9割
②メスが9割
③オス：メス＝7：3
④オス：メス＝3：7

正解は、②なんですよ。ちなみに、ライオンなどの例外はありますが、基本的に1つの群れにオスは1頭。一見、変な構成に見えるかもしれませんが、実はコレ、ちゃんと理由がある。

「この群れで一番強いのはオレだ～！」とオス同士はケンカします。人間界でもありますが。自然界では、ボスの座に闘い敗れた個体は、どこかに逃げる。〝勝った〟勇者も敗者を追うようなことはしません。しかし、動物園の中ではそれができません。仮に逃げ回ったとして、いずれ

◆年間パスポート◆

多摩動物公園の入場料は、一般600円▽65歳以上300円▽小学生&都内在住・在学の中学生無料。「年間パスポート」も来年3月まで発売中。1800円で何度でも、とお得。9：30am―5pm。水曜日が休園日。

勝者に捕まり、死に至る可能性があります。その事態を回避するために、このような構成がとられるのです。ゆえに、ある群れにオスが生まれた場合は、他の動物園に移動させます。トラの「センイチ」が大阪に婿入りしたように（11ページに小話）。とはいえ台所事情はどこの動物園も同じ。どこの動物園でも、アブれたオスのやり場に困っているそうです。ある意味、「ハーレム！」ですが、子供が育ってきて「エディプス・コンプレックス」（父殺し）の闘いを挑み、ボスの世代交代・政権交代劇も起きる…。

ライオンはおのずからなる風格、ゴリラは「シルバー・バック」と決まっているけれど、ではキリンやシマウマの、つかの間のハーレム王者はだれ？　あなたの目で見つけてくださいね♪　「オトコ選びと一緒ね、これは難しい」こと請け合い。

（関）

ついでに……VS北京動物園　比較寸感

豊かな自然に恵まれた52・3ヘクタール。多摩動物公園は巨大なハイキングコースでもある。とうてい1日ではまわりきれない。高低差も最高で70メートル、自然景観を生かして、というのが特徴だからわが中大よりも急な坂続き。靴底に「等高線」を感じながら歩いたら……帰る頃にはみなゲッソリ。ダイエットにもいいかも、ですよ。

帰りぎわ、出口付近のおみやげ売り場は、入るのもためらうくらいの大盛況だった。みなさん、どこにそんな体力が、というくらい。でも、やっぱり気になる動物園グッズ。雑踏に踏み入ってみると、中にはぬいぐるみ、おもちゃ、文房具など、ありとあらゆるおみやげがずらり。多摩や上野でしか手に入らないものが多い。ひときわ人気はお菓子コーナー。こっちはほとんど多摩オリジナル。種類も豊富、パッケージもかわいらしい。とあるお母さんは5つもかかえている。そんなわけでレジには列がたえない。日曜日の夕方はなるべく避けたほうがいいでしょうね。

ことし8月に訪れた中国の北京動物園には、おみやげ屋がなかった。売店は閑散としているし、売られているのは動物とは関係ない、プラモデル、小物入れなど。おみやげ文化って日本独特なんですかね。中国はといえば、敷地内にゲームセンターがあったり、動物にもエサはあげ放題だったり（日本の動物園では禁止）。きわめつけが、パンダを見るのに特別料金がかかること（といっても75円ですが）。

動物園を通して日本が見えてくるかもしれない。そのくらい日本の動物園は、お客さんのためにあの手この手をつくしている。すこし子供向けかな、と思うけど。北京動物園は客も大人の姿が多かった気がする。

タマ動のレストランは、中大の学食よりもっとキレイですよ（笑）。

（江部）

×　×

【学生記者取材班】江部理恵（法3年）▽小野光雄（総3年）▽関敦子（文3年）▽酒井まりえ（文3年）▽津江瞳（文1年）